

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）	研究 0-1
1. 人文学部・人文科学研究科	研究 1-1
2. 人間発達科学部・人間発達科学研究科	研究 2-1
3. 経済学部・経済学研究科	研究 3-1
4. 医学部	研究 4-1
5. 薬学部	研究 5-1
6. 医学薬学研究部	研究 6-1
7. 理学部	研究 7-1
8. 工学部	研究 8-1
9. 理工学研究部	研究 9-1
10. 芸術文化学部・芸術文化科学研究科	研究 10-1
11. 和漢医薬学総合研究所	研究 11-1

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況	研究成果の状況	質の向上度
人文学部・人文科学研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	改善、向上している
人間発達科学部・人間発達科学研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
経済学部・経済学研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
医学部	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
薬学部	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
医学薬学研究部	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
理学部	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
工学部	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
理工学研究部	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
芸術文化学部・芸術文化科学研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
和漢医薬学総合研究所	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している

人文学部・人文科学研究科

I 研究の水準 研究 1-2

II 質の向上度 研究 1-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 研究業績について、第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）と第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）を比較すると、単著論文・著書は平均64件から平均79件、共著論文・著書は平均9件から平均16.8件、書評・翻訳等は平均14件から平均22.5件となっている。
- 学会発表について、第1期中期目標期間と第2期中期目標期間を比較すると、発表数は平均40件から平均50.5件、そのうち国際学会での発表は平均9件から平均12.1件となっている。
- 科学研究費助成事業について、学部独自の相談員制度や不採択者に対する科研申請促進費制度等の取組を行っており、新規採択内定率は第1期中期目標期間の平均19.2%から第2期中期目標期間の平均26%となっている。また、研究分担者としての第2期中期目標期間における交付内定金額は平均約630万円、教員一人当たり約30万円となっている。

以上の状況等及び人文学部・人文科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に言語学、日本文学、文学一般の細目において特徴的な研究成果がある。また、研究科の研究方針に沿って東アジア研究を重視しており、研究業績のうち東アジア研究の割合については、第1期中期目標期間の34%から第2期中期目標期間の56%となっている。
- 特徴的な研究業績として、言語学の「北東アジアの稀少言語コリヤーク語の記述言語学的研究」、日本文学の「森鷗外のドイツ留学と日本近代劇」、文学一般の「近代朝鮮の文学者李光洙の研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に人文地理学、社会学の細目において特徴的な

研究成果がある。

- 特徴的な研究業績として、人文地理学の「防災・まちづくりのための地図教育研究」、社会学の「難病および高次脳機能障害を主要事例とするピア・サポート研究」がある。

以上の状況等及び人文学部・人文科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、人文学部・人文科学研究科の専任教員数は 62 名、提出された研究業績数は 11 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 8 件（延べ 16 件）について判定した結果、「SS」は 1 割、「S」は 7 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 4 件（延べ 8 件）について判定した結果、「S」は 6 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 研究業績について、第1期中期目標期間と第2期中期目標期間を比較すると、単著論文・著書は平均64件から平均79件へ、共著論文・著書は平均9件から平均16.8件へ、書評・翻訳等は平均14件から平均22.5件へ増加している。
- 学会発表について、第1期中期目標期間と第2期中期目標期間を比較すると、発表数は平均40件から平均50.5件へ、そのうち国際学会での発表は平均9件から平均12.1件へ増加している。
- 科学研究費助成事業について、新規採択内定率は第1期中期目標期間の平均19.2%から第2期中期目標期間の平均26%へ増加している。また、研究分担者としての第2期中期目標期間における交付内定金額は平均約630万円、教員一人当たり約30万円となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 特徴的な研究業績として、言語学の「北東アジアの稀少言語コリャーク語の記述言語学的研究」、日本文学の「森鷗外のドイツ留学と日本近代劇」、文学一般の「近代朝鮮の文学者李光洙の研究」、人文地理学の「防災・まちづくりのための地図教育研究」、社会学の「難病および高次脳機能障害を主要事例とするピア・サポート研究」がある。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

人間発達科学部・人間発達科学研究科

I	研究の水準	研究 2-2
II	質の向上度	研究 2-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 現代的・地域的課題に対応した研究活動として、平成24年度に富山県教育委員会等との共同研究による『親を学び伝える学習プログラム 手引き書』の公表、文部科学省委託事業「平成22年度及び平成23年度 ICTの活用による生涯学習支援事業」等を実施している。
- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の科学研究費助成事業について、申請率は69%から78%の間を推移しており、採択率は38%から57%の間を推移している。
- 第2期中期目標期間の科学研究費助成事業を除く外部資金の獲得金額は、年間約3,610万円から約4,580万円の間を推移している。

以上の状況等及び人間発達科学部・人間発達科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に教育学、教科教育学、日本文学において特徴的な研究成果がある。また、教員の資質・能力及び教育プログラム開発や教材開発に関する研究、地域の課題解決や望ましい人間環境の実現に資する学術的研究を行っており、国際ワークショップへの招待講演や学会の研究奨励賞等を受賞している。
- 特徴的な研究業績として、教育学の「イギリス技術者養成史の研究」、教科教育学の「生活科・総合的な学習の時間における学習指導法に関する研究」、日本文学の「現代児童文学の研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に国際関係論において特徴的な研究成果がある。また、地域の教育機関及び社会福祉関連機関から年間300件から500件近くの指導助言・講演の依頼を受けるなど、研究成果を地域に還元している。

- 特徴的な研究業績として、国際関係論の「国際関係理論における文明横断型アプローチの研究」があり、西洋近代の経験に基礎を置いて発達した国際関係理論を、今日の文化的多様性へ位置付け直し、グローバル化時代における国際関係理論の再定義を試みた研究を行っている。

以上の状況等及び人間発達科学部・人間発達科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、人間発達科学部・人間発達科学研究科の専任教員数は 65 名、提出された研究業績数は 11 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 10 件（延べ 20 件）について判定した結果、「S」は 8 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 1 件（延べ 2 件）について判定した結果、「S」以上は 0 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間に「親を学び伝える学習プログラム」、「富山型教員養成プログラムの共同研究・開発」、「社会資本の活性化を先導する歩行圏コミュニティづくり」等の共同研究や受託研究に取り組んでいる。
- 第2期中期目標期間の科学研究費助成事業について、申請率は69%から78%の間を推移しており、採択率は38%から57%の間を推移している。また、科学研究費助成事業を除いた外部資金の獲得金額は約3,610万円から約4,580万円の間を推移している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 教員の資質・能力及び教育プログラム開発や教材開発に関する研究、地域の課題解決や望ましい人間環境の実現に資する学術的研究に取り組んでおり、学会での研究奨励賞の受賞や国際学術誌への掲載及び国際ワークショップでの招待講演等を行っている。また、地域の教育機関及び社会福祉関連機関から年間300件から500件程度の指導助言・講演の依頼を受けるなど、研究成果を地域に還元している。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

経済学部・経済学研究科

I	研究の水準	研究 3-2
II	質の向上度	研究 3-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の研究成果の公表件数は、論文は合計400件、各年度の教員一人当たり件数は約1件、単著・編著は合計81件、各年度の教員一人当たり件数は約0.2件となっている。また、学会報告は合計134件となっている。
- 研究教育事業「東アジア「共生」学創成の学際的融合研究(CEAKS)」において、「アジア」と「共生」をキーワードとした研究活動を行い、その成果として、平成24年度に『CEAKS研究叢書』を出版している。
- 第2期中期目標期間に採択された科学研究費助成事業の総額は約9,400万円となっており、採択率は12.9%から25%の間を推移している。また、寄附金等、その他の外部資金の受入総額は約2,380万円となっている。

以上の状況等及び経済学部・経済学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判断した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に金融・ファイナンス、経済統計、理論経済学、経済政策の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、金融・ファイナンスの「銀行業の産業組織論的研究：効率性仮説と平穏仮説の同時検証」、経済統計の「不動産市場における価格指数の研究」、理論経済学の「循環的経済成長と数理モデルに関する研究」、経済政策の「廃棄物処理とリサイクルに関する経済学的研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特にジェンダーの細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、ジェンダーの「北陸地域における家族形成に関する研究」があり、研究成果に基づき、富山県の審議会や国際シンポジウム等に

において招待講演を行っている。

以上の状況等及び経済学部・経済学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、経済学部・経済学研究科の専任教員数は 66 名、提出された研究業績数は 14 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 13 件（延べ 26 件）について判定した結果、「S」は 7 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 1 件（延べ 2 件）について判定した結果、「S」は 5 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 研究教育事業「東アジア「共生」学創成の学際的融合研究(CEAKS)」において、「アジア」と「共生」をキーワードとした研究活動を行い、その成果として、平成24年度に『CEAKS 研究叢書』を出版している。
- 国際交流協定校との研究交流を深めるため、平成24年度から平成26年度に南開大学日本研究院（中国）等6部局と新たに部局間交流協定を締結しているほか、アジア共同体国際シンポジウムを実施し、北東アジア学術交流ネットワークを形成している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 特徴的な研究業績として、金融・ファイナンスの「銀行業の産業組織論的研究：効率性仮説と平穏仮説の同時検証」、経済統計の「不動産市場における価格指数の研究」、理論経済学の「循環的経済成長と数理モデルに関する研究」、経済政策の「廃棄物処理とリサイクルに関する経済学的研究」、ジェンダーの「北陸地域における家族形成に関する研究」がある。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

医学部

I	研究の水準	研究 4-2
II	質の向上度	研究 4-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における各年度の研究成果の発表状況は、国内学会は1,329件から1,524件、国際学会は242件から349件、英文原著論文は290件から361件の間を推移している。
- 科学研究費助成事業の採択状況は、平成22年度の89件（約1億4,300万円）から平成27年度の97件（約1億9,300万円）となっている。

以上の状況等及び医学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に神経生理学・神経科学一般、実験病理学、ウイルス学、小児科学、産婦人科学の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、神経生理学・神経科学一般の「記憶形成の脳内メカニズム」、実験病理学の「血管周皮細胞を起点とする新しい血管の病態学」、ウイルス学の「抗RNAウイルス剤の開発に関する研究」、小児科学の「川崎病冠動脈障害進展機序に関する研究」、産婦人科学の「ナノマテリアルと生殖毒性の研究」がある。中でも「記憶形成の脳内メカニズム」は、異なる古い記憶を人為的に組み合わせ、新しい記憶を作り出すことに成功しており、PTSDをはじめとする精神疾患の治療法創出につながる成果をあげているほか、平成25年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）を受賞している。
- 社会、経済、文化面では、人の一生涯にわたるリスク要因の同定と健康施策への反映を目的としたライフコース疫学を実施している。また、富山県在住の児童を対象にした出生コホート研究では、就学前の要因が青年期の肥満や生活の質に影響を与えることを明らかにし、県内地域の母子保健施策へ反映されている。

以上の状況等及び医学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、医学部の専任教員数は 196 名、提出された研究業績数は 39 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 39 件（延べ 78 件）について判定した結果、「SS」は 2 割、「S」は 6 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 2 件（延べ 4 件）について判定した結果、「S」は 8 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間における各年度の研究成果の発表状況は、国内学会は1,329件から1,524件、国際学会は242件から349件、英文原著論文は290件から361件の間を推移している。
- 第2期中期目標期間において、海外19か国の大学・研究所等と25件の共同研究を実施しており、国際交流及び研究交流を通じて、若手研究者の育成に取り組んでいる。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 脳科学を中心とした研究においては、「記憶形成の脳内メカニズム」の研究により、平成25年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）を受賞しており、異なる古い記憶を人為的に組み合わせ、新しい記憶を作り出すことに成功したことは、マスメディアで多数報道されている。
- 新型インフルエンザ薬の開発では、致死率の高いエボラ出血熱に使用できる薬剤として世界的に評価されている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

薬学部

I	研究の水準	研究 5-2
II	質の向上度	研究 5-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における総論文数は580件となっており、教員一人当たり約10件の原著論文を公表している。また、インパクトファクター（IF）が5以上の学術誌に76件が掲載され、教員一人当たり1.3件となっている。
- 第2期中期目標期間における科学研究費助成事業の採択率は44%から56%の間を推移しており、教員一人当たりの平均金額は約132万円となっている。また、共同研究や受託研究等の外部資金は、平均1億1,760万円となっている。

以上の状況等及び薬学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目 II 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に物理系薬学の細目において卓越した研究成果がある。また、日本薬学会賞をはじめ、学部全体で41件の受賞があるほか、第2期中期目標期間に海外の大学や研究機関等と37件の国際共同研究を行い、37件の原著論文として発表するなど、薬化学と薬剤学・薬理学分野で国内の中心的な研究拠点となっている。
- 卓越した研究業績として、物理系薬学の「精神遅滞関連タンパク質の立体構造に関する研究」があり、精神遅滞の原因タンパク質PQBP1とスプライシング因子U5-15kDの複合体構造を決定し、PQBP1のC末端領域に存在するYxxPxxVLモチーフがU5-15kDの疎水性ポケットに結合していることを明らかにし、IFが10以上の国際的な学術雑誌に研究論文が掲載されている。
- 特徴的な研究業績として、機能物性化学の「新奇蛍光プローブの開発に関する研究」があり、新奇なバイオプローブ用色素として期待できる環境非応答型円偏光発光分子を開発している。

以上の状況等及び薬学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、薬学部の専任教員数は59名となっている。

学術面では、提出された研究業績14件（延べ28件）について判定した結果、「SS」は1割、「S」は6割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間の教員一人当たりの原著論文数は約10件で、IFが5以上の学術誌に1.3件を発表している。
- 国内外の学会発表数は、平成21年度の332件から平成27年度の364件となっている。
- 共同研究や受託研究等の外部資金の受入金額は、平成21年度の約1億3,200万円から平成27年度の約2億円となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間に海外の大学や研究機関等と37件の国際共同研究を行い、その成果の一部を37件の原著論文として発表している。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

医学薬学研究部

I	研究の水準	研究 6-2
II	質の向上度	研究 6-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における原著論文数は3,231件で、インパクトファクター（IF）5以上の雑誌に掲載された論文数は254件となっている。
- 第2期中期目標期間における科学研究費助成事業の採択状況は、平均約2億6,200万円で、採択率は50%を超えている。
- 第2期中期目標期間において、海外の大学や研究機関等との国際共同研究を121件実施している。

以上の状況等及び医学薬学研究部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に神経生理学・神経科学一般、物理系薬学、実験病理学、ウイルス学、小児科学、産婦人科学の細目において卓越した研究成果がある。また、学会賞等の受賞は126件となっている。
- 卓越した研究業績として、神経生理学・神経科学一般の「記憶形成の脳内メカニズム」、物理系薬学の「精神遅滞関連タンパク質の立体構造に関する研究」、実験病理学の「血管周皮細胞を起点とする新しい血管の病態学」、ウイルス学の「抗RNAウイルス剤の開発に関する研究」、小児科学の「川崎病冠動脈障害進展機序に関する研究」、産婦人科学の「ナノマテリアルと生殖毒性の研究」がある。中でも「ナノマテリアルと生殖毒性の研究」は、食品や化粧品等に含まれるナノマテリアルのサイズにより、胎盤通過が異なり胎児の死産や体重減少をきたすことを証明し、生殖毒性を消失させるナノマテリアルの化学修飾法を示し、ナノテクノロジー分野のトップジャーナルに掲載されている。
- 社会、経済、文化面では、もやもや病における微小出血についての検討や脳血行再建術を安全に実施するための検証を行っている。

以上の状況等及び医学薬学研究部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、医学薬学研究部の専任教員数は 255 名、提出された研究業績数は 44 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 44 件（延べ 88 件）について判定した結果、「SS」は 2 割、「S」は 5 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 2 件（延べ 4 件）について判定した結果、「S」は 8 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間において、教員一人当たりの原著論文は年度平均約 2.2 件、国際学会発表は年度平均約 1.5 件、国内学会発表は年度平均約 7.2 件となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間において、学会賞等の受賞は 126 件となっており、時實利彦記念賞（1名）、和漢医薬学会賞（1名）、食創会安藤百福賞大賞（1名）、文部科学大臣表彰科学技術賞（研究分門）（1名）、日本薬学会薬学会賞（1名）、日本薬学会学術貢献賞（2名）等を受賞している。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

理学部

I	研究の水準	研究 7-2
II	質の向上度	研究 7-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の原著論文は1,068件で、教員一人当たり13.7件となっている。また、著書、総説・解説は教員一人当たりそれぞれ1.1冊、2.5件となっている。
- 第2期中期目標期間に、国内会議・国際会議等に招待又は依頼を受けた講演数は平均43.8件となっている。
- 第2期中期目標期間における科学研究費助成事業の申請率は毎年度100%を超えており、新規採択率は14.9%から30.7%の間を推移している。
- 第2期中期目標期間における受託研究の受入件数は、平成22年度の5件から平成27年度の15件となっている。また、共同研究は平均17.8件を実施し、技術交流サロン等で研究内容を発表している。

以上の状況等及び理学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に天文学、環境動態解析、神経生理学・神経科学一般、無機化学の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、天文学の「星間分子ギ酸メチルのねじれ振動励起状態のマイクロ波分光に関する研究」、環境動態解析の「地球化学的手法に基づく古環境推定に関する研究」、神経生理学・神経科学一般の「昆虫体内時計細胞の生理学的研究」、無機化学の「金(I)錯体の光励起会合体の研究」がある。そのうち天文学の「星間分子ギ酸メチルのねじれ振動励起状態のマイクロ波分光に関する研究」は、一連の星間分子の研究により第31回とやま賞を受賞している。
- 社会、経済、文化面では、特に神経生理学・神経科学一般、生態・環境の細目において特徴的な研究成果がある。

- 特徴的な研究業績として、神経生理学・神経科学一般の「昆虫体内時計細胞の生理学的研究」の研究成果は、受験生向けの雑誌で紹介されているほか、生態・環境の「昆虫類の平行進化に関する分子系統学的解析」は、シドニー大学（オーストラリア）との共同研究となっており、オーストラリア公共放送協会のサイエンスニュースで取り上げられている。

以上の状況等及び理学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、理学部の専任教員数は78名、提出された研究業績数は18件となっている。学術面では、提出された研究業績18件（延べ36件）について判定した結果、「SS」は1割、「S」は6割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績6件（延べ12件）について判定した結果、「S」は8割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 科学研究費補助金コーディネーターを配置し、申請内容を事前に精査するシステムを導入したことにより、科学研究費助成事業の申請率は、第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）の108.4%から第2期中期目標期間の112.3%となっている。
- 第2期中期目標期間における、学会等における受賞は3件から8件の間となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第1期中期目標期間と第2期中期目標期間を比較すると、インパクトファクター（IF）10以上の雑誌に掲載された論文数は、2件から4件（生物分野は2件、化学分野は1件、物理分野は1件）へ、また、IF5以上の雑誌に掲載された論文数は3件から27件となっている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

工学部

I	研究の水準	研究 8-2
II	質の向上度	研究 8-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の1年間当たりの研究業績の発表件数は、学術論文は276.7件、著書13.3件となっている。
- 科学研究費助成事業の新規採択率は、平成22年度の20.6%から平成27年度の35.4%となっている。
- 研究資金の受入状況について第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）と第2期中期目標期間の平均を比較すると、受託研究は17.0件から28.8件、共同研究は66.5件から75.7件となっている。
- 第2期中期目標期間の国際会議の開催件数は平均22件となっている。

以上の状況等及び工学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目 II 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に物理化学の細目において特徴的な研究成果がある。また、第2期中期目標期間に平成25年度高分子学会賞等を受賞している。
- 特徴的な研究業績として、物理化学の「液体界面の構造、分光、輸送の理論研究」があり、水等の液体界面の分子構造、界面選択的振動スペクトル、蒸発・凝縮を伴う物質・エネルギー輸送の諸問題を、量子化学計算や分子シミュレーションにより解明している。
- 社会、経済、文化面では、生物機能・バイオプロセスの細目において卓越した研究成果がある。また、超高速ネットワーク及びヘルスケア・家電ネットに適用できる新たなアンテナを開発するなど、社会インフラ等の工学分野やバイオテクノロジー分野において成果をあげている。
- 卓越した研究業績として、生物機能・バイオプロセスの「単一細胞由来抗体迅速発現単離システムの開発」の研究があり、治療・診断・研究用モノクローナル抗体の新規単離法の開発に関する特許を米国、オーストラリア、ドイツ等

で取得している。

以上の状況等及び工学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、工学部の専任教員数は 104 名、提出された研究業績数は 18 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 17 件（延べ 34 件）について判定した結果、「SS」は 1 割未満、「S」は 8 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 13 件（延べ 26 件）について判定した結果、「SS」は 2 割、「S」は 5 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間の1年間当たりの研究業績の発表件数は、学术论文は276.7件、著書13.3件となっている。
- 科学研究費助成事業の新規採択率は、平成22年度の20.6%から平成27年度の35.4%となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 「単一細胞由来抗体迅速発現単離システムの開発」の研究により、治療・診断・研究用モノクローナル抗体の新規単離法の開発に関する特許を米国、オーストラリア、ドイツ等で取得している。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

理工学研究部

I	研究の水準	研究 9-2
II	質の向上度	研究 9-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 教員一人当たりの第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の論文数は年度平均2.4件、国際会議での発表数は平均1.5件となっている。
- 第2期中期目標期間の科学研究費助成事業の採択状況（新規及び継続）は平均92件（約1億8,450万円）となっている。また、共同研究、受託研究、寄附金の合計受入状況は平均255件（約3億8,150万円）となっている。

以上の状況等及び理工学研究部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に環境動態解析、神経生理学・神経科学一般、無機化学の細目において特徴的な研究成果がある。また、生命・情報・システム、ナノ・新機能材料、環境・エネルギーの3学域で研究成果がある。
- 特徴的な研究成果として、環境動態解析の「地球化学的手法に基づく古環境推定に関する研究」、神経生理学・神経科学一般の「脳シナプス可塑性と脳回路の発達の研究」、「昆虫体内時計細胞の生理学的研究」、無機化学の「金(I)錯体の光励起会合体に関する研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に生物機能・バイオプロセスの細目において卓越した研究成果がある。また、基礎研究分野と応用研究分野の両方において、研究成果が複数のマスメディアで報道されている。
- 卓越した研究業績として、生物機能・バイオプロセスの「単一細胞由来抗体迅速発現単離システムの開発」があり、5種類の特許を申請し、3種類は日本のみならず、米国、オーストラリア、ドイツ、中国等で成立している。さらに、大学から企業等に対して特許のライセンス化を行っている。

以上の状況等及び理工学研究部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、理工学研究部の専任教員数は 182 名、提出された研究業績数は 36 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 35 件（延べ 70 件）について判定した結果、「SS」は 1 割、「S」は 7 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 19 件（延べ 38 件）について判定した結果、「SS」は 2 割、「S」は 6 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- インパクトファクター（IF）10以上の雑誌に掲載している論文数は、第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）、第2期中期目標期間ともに5件となっている。筆頭著者あるいは責任著者で発表したIF5クラスの雑誌に掲載している論文数は第1期中期目標期間の3件から第2期中期目標期間の33件となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 「単一細胞由来抗体迅速発現単離システムの開発」により、5種類の特許を申請し、3種類は日本のみならず、米国、オーストラリア、ドイツ、中国等で成立している。さらに、大学から企業等に対して特許のライセンス化を行っている。
- 「昆虫体内時計細胞の生理学的研究」では、オクスフォード大学（英国）で開催された第12回欧州時間生物学会において、シンポジウムのセレクトッド・スピーカーに選ばれている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

芸術文化学部・芸術文化学研究科

I	研究の水準	研究 10-2
II	質の向上度	研究 10-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 著書等の研究成果を発表する「論文系教員」の研究業績のうち、論文、口頭発表、共同研究、特許出願件数の状況について、平成16年度から平成19年度の年度平均件数と第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の年度平均件数を比較すると、論文発表件数は22.0件から23.2件、口頭発表件数は48.8件から63.5件、共同研究の件数は10.0件から14.7件、特許出願件数は0.5件から2.0件となっている。
- 第2期中期目標期間における作品、デザイン等で研究成果を発表する「作品系教員」が展覧会や公募展等で発表した作品業績数は、教員一人当たり年度平均4.9件となっている。
- 科学研究費助成事業の採択金額は、平成16年度から平成19年度の年度平均約1,420万円から第2期中期目標期間の年度平均約1,990万円となっている。

以上の状況等及び芸術文化学部・芸術文化学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に芸術一般において卓越した研究成果がある。また、再興第97回院展での日本美術院賞（大観賞）や第7回キッズデザイン賞の優秀賞「少子化対策担当大臣賞」等を受賞している。
- 卓越した研究業績として、芸術一般の「先端的絵画作品制作による革新的表現の開拓研究」があり、再興第97回院展で日本美術院賞（大観賞）と天心記念茨城賞を受賞している。
- 社会、経済、文化面では、特に芸術一般において卓越した研究成果がある。また、海外の展覧会へ招待出品を行っているほか、紫綬褒章等を受章している。

- 卓越した研究業績として、芸術一般の「伝統的技法・素材展開による工芸・クラフト作品制作による現代的価値観の研究」があり、平成 26 年度に外務省国際交流基金が主催する「技の美ー日本の工芸」展（シンガポール）へ招待出品を行っている。
- 特徴的な研究業績として、地域研究の「地域文化資源（音楽・伝統文化・文化的景観）の活用による社会問題解決の政策研究」、芸術一般の「現代美術におけるメディア・鉄・木の作品制作による先端的美術表現の研究」がある。

以上の状況等及び芸術文化学部・芸術文化学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、芸術文化学部・芸術文化学研究科の専任教員数は 48 名、提出された研究業績数は 10 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 8 件（延べ 16 件）について判定した結果、「SS」は 3 割、「S」は 5 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 5 件（延べ 10 件）について判定した結果、「SS」は 4 割、「S」は 6 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 地場産品の高岡銅器のルーツや技法解明に向けて、中国や台湾等の東アジア地域の研究機関と国際的な古代青銅器の高錫青銅材料研究や鑄造技術研究を行い、平成 26 年度に富山県高岡市で高岡銅器の展望を検討するフォーラムを開催している。
- 科学研究費助成事業の採択金額は、平成 16 年度から平成 19 年度の年度平均約 1,420 万円から第 2 期中期目標期間の年度平均約 1,990 万円となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 芸術一般の「先端的絵画作品制作による革新的表現の開拓研究」や「伝統的技法・素材展開による工芸・クラフト作品制作による現代的価値観の研究」等で研究成果をあげており、海外の展覧会へ作品が招待出品されているほか、再興第 97 回院展での日本美術院賞（大観賞）、第 7 回キッズデザイン賞の優秀賞（少子化対策担当大臣賞）、平成 26 年度グッドデザイン賞等を受賞している。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

和漢医薬学総合研究所

I	研究の水準	研究 11-2
II	質の向上度	研究 11-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における原著論文数は551件で、教員一人当たり年度平均3.4件となっている。また、教員一人当たりの学会発表数は、年度平均7.2件となっている。
- 国際共同研究拠点オフィスを中国、タイ、エジプトに設置し、海外9研究機関と部局間協定を締結し、伝統医薬学領域における国際的なハブ研究拠点として国際共同研究を推進している。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間における共同利用・共同研究課題数は年度平均21件で、平成27年度の教員一人当たりの共同研究数は1件となっている。
- 伝統医薬に関する資源科学的、情報科学的、基礎生命科学的及び臨床医学的なエビデンスを統合・整理した和漢薬データベースを構築し、英語版についても公開している。なお、文部科学省共同利用・共同研究拠点の期末評価判定を踏まえ、適切な対応が望まれる。

以上の状況等及び和漢医薬学総合研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に神経化学・神経薬理学の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、神経化学・神経薬理学「アルツハイマー病治療薬創出の研究」があり、伝統薬物により、これまでとは異なる創薬コンセプトの根本的治療薬として、神経回路網再構築薬の開発を行っている。

- 社会、経済、文化面では、地域の企業や行政と連携した研究を行っており、オリジナルブランド医薬品の製品開発・販売を行っている。また、和漢薬のデータベースを構築・公開しており、データベースへのアクセスは年間 10 万件を超えている。

以上の状況等及び和漢医薬学総合研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、和漢医薬学総合研究所の専任教員数は 28 名、提出された研究業績数は 6 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 5 件（延べ 10 件）について判定した結果、「SS」は 1 割、「S」は 7 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 3 件（延べ 6 件）について判定した結果、「SS」は 2 割、「S」は 7 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 国際共同研究拠点オフィスを北京大学医学部薬学院（中国）、チュラロンコン大学薬学部（タイ）及びカイロ大学薬学部（エジプト）等に設置し、さらに、ソウル大学校薬学大学天然物科学研究所（韓国）やシラパコーン大学薬学部（タイ）等の海外9研究機関と部局間協定を締結し、伝統医薬学領域における国際的なハブ研究拠点として学術研究及び国際共同研究を推進している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間における学会賞等の受賞者は、23名となっている。
- 伝統医薬に関する資源科学的、情報科学的、基礎生命科学的及び臨床医学的なエビデンスを統合・整理した和漢薬データベースを構築し、英語版についても公開しており、データベースへのアクセスは年間10万件を超えている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。